

堀田善衛の被徴用体験

—— 対日文化工作委員会と徴用された日本人

丁世理

✉ dingshili1990@163.com

From December 1945 to December 1946, Hotta Yoshie (1918-1998) was employed by the Cultural Work Committee on Japanese, a group under the Central Publicity Department of the Nationalist (Kuomin) government. The predecessor of the committee was the International Research Institute and the International Publicity Office of the Central Publicity Department, which were known as intelligence agencies on Japan for the wartime Chongqing Nationalist government. Some Japanese prisoners, who would later become members of Chongqing faction of the committee, were appointed by both agencies to engage in propaganda towards Japan. At the same time, many Japanese who had settled in Shanghai after the war were recruited by the Cultural Work Committee on Japanese when it was established. Those Japanese people are tentatively defined as the Shanghai faction in this article. Although Hotta belonged to the Shanghai faction, he maintained constant contact with the Chongqing faction. Unlike many other members of both factions, Hotta reflected on the Japanese invasion of China after the war. He also criticized China for being, as he saw it, oversensitive to the revival of Japanese militarism.

Keywords Cultural Affairs Committee on Japanese(対日文化工作委員会), The International Research Institute(国際問題研究所), The International Publicity Office of the Central Publicity Department(中央宣伝部国際宣伝処), Recruited by the Nationalist(Kuomin) government(留用), Perceptions of China(中国認識)

1 はじめに

1945年3月24日に、堀田善衛は上海に渡った。そして5か月後に上海で敗戦を迎えた。彼の「上海日記」¹によれば、同年12月前後から、国民党中央宣伝部に属する対日文化工作委員会に徴用された。同委員会とは如何なる機関であるかは、陳童君「「留用」²日本人のくまなごし」——堀田善衛『歯車』の生成とその問題意識(『國語と國文学』、2013.6)において、概略的な紹介がなされているが、戦時中から戦後への変遷及び同機関に徴用された日本人のことには触れていない。

同委員会の変遷を追えば、その前身機関では戦時中から蒋介石の率いる重慶政権の対日宣伝に協力していた元日本軍捕虜が働いていたことがわかる。さらに、その後続機関を調べれば、戦時中から上海にいた日本人居留民のうち、戦後同委員会に徴用された者の存在も確認できる。仮に前者を「重慶グループ」、後者を「上海グループ」と呼ぶことにする。

「上海グループ」に属する堀田は、彼自身の主張以外に、同委員会に徴用された記録が現在見つかっていない。しかし、「上海グループ」のメンバーの何人かと引揚げ後にも連絡を取っていたことを示す資料は、現在神奈川近代文学館所蔵の「堀田善衛文庫」の中に含まれている。一方、「重慶グループ」とのかかわりは、「上海日記」と、1957年に上海を再訪したのちに書いた回想録『上海にて』(筑摩書房、1959)から、その断片をうかがうことができる。二つのグループとの交わりは、堀田の徴用を知る上で有益な手がかりになる。

本稿では、「上海日記」と中国側の資料を踏まえつつ、「重慶グループ」と「上海グループ」の活動を明らかにし、対日文化工作委員会の実態、及び堀田はじめ、そこに徴用されていた日本人の思想的動向を探ることによって、堀田の上海体験の第二段階³にあたる被徴用体験をより全面的に把握しようと試みる。

2 堀田と対日文化工作委員会

貴志俊彦「中国奥地の日本人捕虜と日本語放送」⁴によれば、対日文化工作委員会は戦後国民党中央宣伝部内に新設された対日放送を所管する部署であった。実際対日放送以外、戦後集中地域に収容された日本人居留民向けの雑誌も発行していた。

国民党の機関紙『中央日報』(上海版)と『改造日報』⁵は、1945年12月10日付の記事で、

1 紅野謙介編『堀田善衛上海日記 滬上天下一九四五』(集英社、2008)、p.104.

2 留めて用いる、つまり徴用を意味する中国語。

3 敗戦を境目に、堀田の上海体験を前後二つの時期に分けることができる。

4 貴志俊彦・川島真・孫安石編『戦争・ラジオ・記憶』(勉誠出版、2006)、pp.77-87.

5 戦後上海に進駐してきた第3方面軍司令長官湯恩伯が日本人居留民及び武装解除された日本軍将兵向けに作

ともに対日文化工作委員会上海事務所の設立を報道している。両紙の報道内容を総合すれば、経緯は次のとおりである。在留日本人居留民及び武装解除された日本軍将兵に対する文化・宣伝工作を展開すべく、中央宣伝部の命を受けて、上海事務所は12月8日に、上海昆山路128号で正式に設立された。主任には羅克典が就任、委員には羅堅白と鄒任之⁶が選ばれた。主な活動は二つある。一つは一般日本人に無料で映画を上映すること。「上海日記」のなかで、1946年度の記述に、映画鑑賞の話が一定の紙幅を占めているのは、それによるものであろう。もう一つは、定期的に居留民のなかの文化人を集めて、文化座談会を開くこと。その開催を重ねていくうち、中国の文芸作品を日本語に訳する事業や、日本人居留民と日本軍捕虜に対する思想教育のための教材編纂にも着手していく。座談会の開催に当たって、対日文化工作委員会は前もって参会者の指名を『改造日報』紙上で行っていた⁷。確認した限りでは、堀田が指名されたことはなかった。当時無名だったことを物語っている。

一方、「上海日記」を見た限りでは、対日文化工作委員会における堀田の仕事は、雑誌編集と日本語放送の二項目に大別できる。雑誌の編集については、1945年12月13日付の日記で、「須田氏〔須田禎一、元朝日新聞記者——引用者註〕との話合ひで、中央宣伝部対日文化工作委員会ですす日文雑誌「新生」に原稿を書き、ついでに編輯を手伝ふことになった」とはじめて言及。現在北京にある中国国家図書館に所蔵されている『新生』は、第2号(1946.3.11)と第5号(1946.5.15)が公開されている。どちらも発行元は、「中央宣伝部対日文化工作委員会上海分会」となっている。第2号巻末に掲げられた「本会工作の近況」に次のような報告がある。

〔1946年——引用者註〕1月18日、重慶にある日本民主革命同志会より榛葉修、加藤次郎、森山末彦の三闘士空路来滬〔上海の略称——引用者註〕し、本会工作に参加。

2月28日、在重慶日本民主革命同志会より更に1名岡山鉄夫氏本会の工作に参加するため来滬。

3月1日より旬刊雑誌「新生」創刊。

3月4日より中央廣播電台〔ラジオ局——引用者註〕XORAより中国大陸にある日僑〔日本人居留民——引用者註〕並びに徒手官兵〔武装解除された日本軍将兵——引用者註〕、更に日本内地向け放送を開始する。同放送は日曜以外毎日午後4時より同45分まで波長333米〔メートル——引用者註〕、周波数は900キロである。

この報告によれば、雑誌の刊行と日本語放送は、ほぼ同時期に展開されたことがわかる。一方、第2号(1946.3.11)から第5号(1946.5.15)まで2か月余りかかったことからすれば、旬刊と称される『新生』の刊行は実際不規則なものだったと思われる。そして、

らせた日本語新聞。1945年10月5日創刊、1946年9月廃刊。

⁶ 本職は日本人居留民の管理機関である日僑管理処の次長、対日文化工作委員会委員は兼職。

⁷ 『改造日報』(1945.12.12)記事「文化座談会、明日日俱で」と同紙(1946.1.9)記事「中央宣伝部対日文化懇談会」などを参照。

1946年3月1日の創刊は、雑誌の編輯を手伝うと堀田が書いた1945年12月13日よりだいぶ遅れていることから見て、編集の計画段階から刊行に漕ぎつけるまで、複雑な事情を抱えていたと推測できる。編集体制の強化を図るためか、戦時中重慶において対日宣伝等に従事していた日本民主革命同志会のメンバーが呼び寄せられたのである。前記の貴志論文によれば、同会は1944年9月14日に重慶で結成され、「三民主義」⁸の信奉と天皇制の打倒を主張する日本軍捕虜の組織である。メンバーは、対日放送に協力するとともに、ポスターやビラ等の散布をしたという。

榛葉などの4人は、いずれも堀田の仕事仲間として、「上海日記」に登場している。1946年6月29日の日記に、「岡山、森山、加藤の三人が帰った。S(榛葉修——引用者註)と二人で虬江碼頭まで送りかたがた、「新生」の五号六号を持ってゆく」とあるが、それ以降、『新生』に関する記述は途絶えてしまう。続いて、同年7月10日付の記述では、「榛葉氏早朝立つ」(引揚げ——引用者註)とある。同年7月11日付の『中央日報』(上海版)に、戦犯容疑者と被徴用者を除く最後の引揚者集団は翌日の船で帰国するとの記事が掲載されている。以上のことを総合してみれば、1946年6・7月頃、『新生』は廃刊されたものと思える。かわりに堀田は日本語放送に配属されていく。1946年5月18日付の日記で、「放送局へ行く。XORAである。(略)国民党中央広播電台管理委員会」と日本語放送について触れている。『上海にて』のなかでも、「一九四六年の夏頃から暮まで、ほとんど毎日通った旧放送局の建物を見出した。(略)私はそこへ、中国各地の政情や経済情勢を日本語で放送するために通った。(略)これが上海中央広播電台⁹XORAの海外放送であった」とある。上海に集中していた日本人居留民と武装解除された日本軍将兵の引揚事業がほぼ完了した段階で、彼等に向けて発行されていた『新生』は当然存在の意義をなくしたのである。ところが、前掲の「本会工作の近況」にある日本語放送に関する説明の通り、当時対日文化工作委員会は、日本内地向けに放送もしているもので、日本人の引揚事業が終わったとしても、日本語の放送は続いたものと思われる。

一方、中央宣伝部系列の対日文化工作委員会に比べて、『改造日報』の発行元である改造日報館は、上海周辺に展開している湯恩伯の率いる第3方面軍のバックアップを受けたため、戦後いち早く活動を開始し、日本人居留民と日本軍捕虜に対する思想教育の活動をより強力に推し進めた。同館は、日本語放送こそしなかったものの、対日文化工作委員会と比較にならないほど、多数の新聞・雑誌を刊行した。社長陸久之と総経理(専務)

8 国民党の創始者孫文が清王朝打倒のために提唱した「民族主義」・「民権主義」・「民生主義」の略称、国民党の基本綱領。

9 上海中央広播電台の前身は、1941年2月22日に支那派遣軍と汪兆銘政権が共同で設立した中国放送協会に所属の上海広播電台である。1944年12日に並河亮は日本放送協会(NHK)に派遣されて、同放送局の日本側局長として赴任し、敗戦まで上海における放送事業を第一線で指導していた。中園英助『私本・GHQ占領秘史』(徳間書店、1993)、pp.80-81によれば、日本に引き揚げた後、並河は世界日報社で極東米軍放送を担当する記者となり、遅れて帰国した堀田も同じ部署で並河の同僚になった。なぜ堀田が榛葉などのように引き揚げられるのではなく、日本語放送に配属されることになったのかは、並河との関連で探ることもできると思うが、現在上海における両者の接点を示す資料はまだ見つかっていない。

金学成の回想¹⁰によれば、中国語の雑誌としては、『改造論壇』(月刊)と『改造画報』があり、日本語の新聞・雑誌としては、『改造日報』、『児童三日刊』、『改造週刊』、『改造評論』(月刊)があったという。

堀田との関連で言えば、『改造日報』には、1945年10月6日から8日にかけて、「希望について」¹¹を連載していた。『改造評論』には、1946年6月号に「反省と希望」¹²を投稿している。しかし、彼はついに改造日報館に加わらなかった。その理由は、やはり「上海日記」から窺い知れる。

1945年11月15日の記録では「島田政雄[元日本共産党員——引用者註]氏と会田さんがやって来て、研究会のやうなものになった。S[島田——引用者註]氏は蔵原惟人の「芸術論」これが最高のものだと云ひ、これのみを信じてみると云った(略)、今日の会では、ぼくはS氏には何もかにも反対したやうだったが、結局文学をわざわざ一度非文学にしようといふ努力、熱情はつまらないこととしか思はず(略)」とある。続いて同月19日の日記では、「この頃は堀田さんたちは[『改造日報』に——引用者註]書かないのかと聞くから、僕は主義者ではないから書かない」とある。

要するに、島田のような共産主義者と一緒に仕事できないとのことである。実際、当時の改造日報館はコミュニストで固められていた。社長陸久之と総経理金学成はともに中国共産党の秘密党員であった¹³。日本側の職員では、陸久之に顧問として迎えられた元日本共産党最高幹部の一人だった中尾勝男のもとに、島田はじめ、竹本節、赤津益造など多くの元日本共産党員が集まっていた¹⁴。現に陸久之と金学成の二人が経営陣から外されたのも、ともに共産主義者の容疑がかかったためである。日本人職員も巻添えを食らう形で、1946年11月、日本に強制送還させられた。

表向き国民党軍の指導下に置かれ、実際中国共産党の影響を受けている改造日報館に、戦前上海に流れ込んだ左翼転向者が多数入ったのに対し、国民党中央宣伝部の下部組織である対日文化工作委員会には、共産主義に賛同しない日本人居留民と国民党寄りの日本民主革命同志会のメンバーが関わるかたちになった。

3 国際問題研究所と中央宣伝部国際宣伝処

日本民主革命同志会のメンバーは、戦時中からすでに重慶政府の対日諜報・宣伝機関に動員された。実際そのような機関は複数存在していた。主要なものとして、軍事委員

10 金学成「有關改造日報社的一些情況」・陸久之「創辦《改造日報》的經過」(『文史資料選輯』第40輯,1982.7), pp.58-71. 並びに陸久之「創辦《改造日報》的前前後後」(中国人民政治協商會議上海市徐匯委員會文史資料委員會編『徐匯文史資料選輯』第5輯,1990.12), p.50.

11 陳童君『堀田善衛の敗戦後文学論——「中国」表象と戦後日本』(鼎書房,2017), p.268に全文収録。

12 『堀田善衛全集12』(筑摩書房,1974), p.118に所収。

13 高網博文著、葛濤訳「上海最後の日文报纸《改造日报》」(『史林』第165号,2017.3), p.1.

14 註13に同じ。

会系列に属する調査統計局、国際問題研究所、軍令部第二庁、政治部第三庁こと文化工作委員会(共産党系)、委員長侍従室第六班、参事室、及び国民党の内部組織である中央党部調査統計局、中央宣伝部国際宣伝処などが挙げられる¹⁵。

それらの機関は、お互いに横の連携があったと思われるが、必ずしもみな対日工作に専従していたわけではない。表向き国共合作とは言いながら、戦時中を通じて、国民党と共産党の間に協力と闘争が繰り返されていたため、上述の諸機関は、対共産党の工作にも大いに注力していたはずである。国民党と共産党の微妙な関係は、日本軍捕虜対策にも影響を及ぼした。もともと中国側の指導の下で日本軍捕虜の教育に当たっていたのは、1940年6月に立ち上げられた日本人民反戦同盟である。同組織は、日本共産党から転向して、日中開戦を機に重慶に脱出した鹿地亘(本名瀬口貢)の主宰で、共産党系の文化工作委員会と緊密な関係にあった。そのため、翌年8月、国民党に解散させられ、メンバーの多くは再び捕虜収容所に送られた。結局国民党寄りの日本民主革命同志会が組織されて、日本軍捕虜のなかで一番勢力を誇るようになった¹⁶。

戦後、共産党系の機関は当然解体され、国民党側の機関は維持あるいは改組された。国際問題研究所だけが解散となった。同所を牛耳っていた責任者の王凡生^{おうほうせい}が急逝したためである。解散後、人員の一部は中央宣伝部国際宣伝処に合流して、新たに対日文化工作委員会が立ち上げられたと思われる。国際問題研究所について、前出の須田禎一は自伝『独弦のペン・交響のペン』(勁草書房、1969)のなかで次のように触れている。

一九四六年一月早々、ある知人が来て、国民党知日派の大物王凡生に逢ってくれ、という。(略)重慶で国際問題研究所長をしていたという王凡生氏は、(略)日本語の雑誌を創刊したいがやってくれないか、という。ぼくは、編集をすべてまかせてくれるならやってもいい、と答えた。

須田の証言にある「王凡生」は、明らかに王凡生のことである。元駐日大使館の参事官を務めていた王は、日中戦争勃発後、蒋介石に引き立てられ、対日情報収集を専管する秘密機関——国際問題研究所の責任者に任命された。元支那派遣軍の総参謀副長で、対中平和工作を模索していた今井武夫は、『支那事変の回想』(みすず書房、1964)において、戦争末期、国際問題研究所上海駐在の工作員を経由して重慶政府と和平交渉を試みたことを記している¹⁷。

中国側の資料『王凡生與国際問題研究所』¹⁸によれば、国際問題研究所は、1938年に国

15 邵毓麟著・本郷賢一訳『抗日戦勝利の前後』(時事通信社、1968)、p.192。

16 秦郁彦『日本人捕虜(上)白村江からシベリア抑留まで』(中央公論新社、2014)、p.187。

17 栗本弘「土井章名誉教授記念論文集」(『東洋研究』第56号、1980.1)、pp.247-341。児玉誉士夫『われ、かく戦えり』(広済堂、1975)、p.138にも類似の記述がある。

18 中国人民政治協商會議株州市委員会文史資料研究委員会編『王凡生與国際問題研究所』(中国人民政治協商會議株州市委員会文史資料研究委員会編輯出版、1990)。

民党政府の軍事委員会のなかに新設された部署である。その内部の業務分担は次の通りである。日本の内政・軍事及び傀儡政権関連を取り扱う敵偽組(第1班)。日本の外交と対外の経済関係をつかさどる国際組(第2班)。資料を管理する図書資料組(第3班)。ほかに、王芑生を補佐する主任室、日常業務・人事を所管する機要組、無線連絡を所管する無線電総台、庶務・福利厚生を所管する総務組、イギリスとの情報共有機関イギリス顧問室及び青山研究室等がある。重慶に置かれた本部以外、上海、東南アジア、欧米諸国に出先機関もあった。

図書資料組の責任者で、後にイギリス顧問室の中国側主任を務めたのは、前記の対日文化工作委員会上海事務所の委員に選ばれた羅堅白である。彼は、今井武夫が戦争末期に模索していた和平工作における中国側の実務担当者¹⁹の一人であった。青山研究室とは、青山和夫(本名黒田善次)のために開設された機関である。戦時中、青山は、鹿地亘・野坂参三と並んで、中国側の対日宣伝・日本軍捕虜に対する教育を手伝った代表者の一人である。日本問題に関して、王芑生の知恵袋的な役割を果たしたという。青山は鹿地亘のグループに対抗すべく、日本民主革命同志会なる組織を盛り立てたのである。従って、戦後対日文化工作委員会に合流した榛葉・加藤・森山・岡山などは、国際問題研究所の系列に入ると言える。

国際問題研究所以外、中央宣伝部国際宣伝処も戦後の対日文化工作委員会と直接の関連があった。中国側の資料「抗戦時期国民党政府的国際宣伝処」²⁰によると、国際宣伝処は以下のような構成である。編撰科(第1課)は英文による日刊と月刊雑誌の発刊を担当。外事科(第2課)は英米諸国の通信社との交流等を担当。対敵科(第3課)は日本向けの宣伝を担当。課長崔万秋の指揮下に、1938年11月11日付の『都新聞』で「嬌声売国奴」と報道された長谷川テルが一時配属されていた²¹。課長はじめ、メンバー全員が日本留学の経験者だったという。撮影科(第4課)は文字通り、写真撮影を担当。国際広播電台伝音科(第5課)はラジオ放送を担当。ほかに対敵宣伝委員会もある。責任者は、日中戦争勃発時に横浜駐在の総領事を務めた邵毓麟^{しょういくりん}である。彼は国際問題研究所の解散に当たって、後始末の一切を任された。同委員会是对敵科と協力して、軍事当局に敵情分析の参考資料を発行したほか、鹿地亘や長谷川テルを日本語放送に投入したり、日本軍捕虜に対して反戦教育のための座談会を開催したりしていた。

国際宣伝処のなかで、直接日本関連の業務に当たったのは、明らかに対敵科と対敵宣伝委員会である。両機関の実施した対日放送に、はじめは鹿地亘や長谷川テルを使用した²¹が、二人が中国共産党にかかわっているため、後に青山和夫の率いる日本民主革命同志会のメンバーを起用するようになった。前記の貴志論文によれば、日本人民反戦同盟解散後、森山末彦・尾崎杉太郎・井上徹・岡山隆・榛葉修などの日本民主革命同志会のメン

19 前掲書、『われ、かく戦えり』, p.138.

20 武燕軍「抗戦時期国民党政府的国際宣伝処」(『歴史档案』第38号, 1990.7), p.125.

21 長谷川テル著(エスペラント語)・高杉一郎訳『嵐の中のささやき』(新評論, 1980), p.205.

バーが、日本語放送の主な担い手となった。

国際問題研究所と対敵科・対敵宣伝委員会に徴用された日本民主革命同志会のメンバー及びもともと国際問題研究所に所属していた羅堅白は、最終的に対日文化工作委員会に入った。この人員移動からすれば、戦時中の国際問題研究所と対敵科・対敵宣伝委員会は、対日文化工作委員会の前身母体と推察できる。対敵科・対敵宣伝委員会と対日文化工作委員会は、ともに中央宣伝部の系列に入るので、恐らく抗日戦争勝利によって、解散となった国際問題研究所の人員を中央宣伝部が吸引して、対敵科・対敵宣伝委員会を対日文化工作委員会に発展的に解消したのではないかと思われる。

4 対日文化工作委員会に徴用された日本人

在重慶の日本人について、1945年10月22日付の『中央日報』（重慶版）に「在渝〔重慶の略称——引用者註〕日人昨挙行聯誼会」との見出しで次の記事が掲載されている。

重慶にいる自由日本人——石信三、井上七五郎、加藤次郎、岡山鉄雄、成田幸吉、松本弥三郎、小林、青山和夫、鹿地亘、塩見聖策、榛葉修、澤村幸雄等、昨日「文化サロン」を借りて、日本投降後はじめての懇談会を開催。（原文中国語、引用者訳）

記事に出たこれらの人々は、当然戦時中重慶政府の対日政策に協力した日本人たちである。青山と鹿地は前述のとおり、指導者である。小林の正体は、苗字しか出ていないので定かではないが、残りは、澤村を除けば、いずれも堀田の「上海日記」あるいは『上海にて』に登場している。『上海にて』では、石は国民党の航空部隊に入った人と紹介されている。塩見は元ハノイ駐在の日本領事館書記生で、1945年3月に反戦外交官との触れ込みで、重慶側のラジオ放送に出演し、日本国民に反戦を呼びかけた²²。井上・成田・松本は、「上海日記」を見た限りでは、堀田の仕事仲間で被徴用者だろうと推測できる。榛葉・加藤・岡山の三人が、前出の森山末彦も併せて対日文化工作委員会に徴用されていたのは、『新生』第2号に明記されている。

このうち、特に注目に値するのは榛葉修である。彼は井上・加藤・岡山・森山などの日本軍捕虜とともに、各自の戦場体験に基づいて、戦時中における日本軍の残虐行為を記録した自白書を1945年1月に中国側に提出し²³、日本軍が作戦中、中国側に対して生物兵器を使ったと証言している²⁴。他の捕虜と違うのは、「中支派遣拾一軍六十八師直属槍一

²² 李新監修『中華民国史大事記』第11巻（中華書局、2011）、p.7675。

²³ それらの記録は、中国第二歴史档案館編『日軍罪行証明書』（南京出版社、2017）、p.12に収録されている。

²⁴ 西里扶甬子『生物戦部隊731』（草の根出版会、2002）によれば、東京裁判の国際検察局文書として、法廷に持ち出されることなく、現在アメリカ国立公文書館で保存されている榛葉の自筆供述書に、彼の経験した日本軍の細菌戦が詳細に報告されている。

六四四部隊防疫給水部九江支部矢作隊」に所属していた榛葉が自ら所属部隊を脱走して、中国側に投降した後に、中国側の対日宣伝に協力したことである。

1945年11月5・6日付の『中央日報』(重慶版)に、中国語に訳されて「今後の日本思想」と題する榛葉の評論が連載されている。同評論では、明治維新から敗戦にかけて、在来の思想を統合した天皇制イデオロギーは、プロイセンの国家思想を取り入れるなど、近代的なかたちを整えつつ、最悪の隷属意識を国民に強いていたという。幸い、マッカーサー元帥の対日処置によって、迫害され続けた自由と進歩の思想は成長期を迎えるようになった。従って、天皇制イデオロギーの根絶こそ、対日管理の政治的目標と思想的根拠であると主張している。

さらに、同年11月7日付の『改造日報』のコラム「日本思想の管制」に、「重慶から切々訴ふ 俘虜日本兵の叫び」と題する榛葉の評論が掲載されている。同評論では、日本軍閥は「民族の強大なる展開は決して罪悪ではないと信じている(略)、毫も戦争挑発者、幾千万の人民の大量屠殺者といふ犯罪人として反省していない」ことと、支配階級は「神ながらの秩序の本源に各自の分担をささげまつろひ、再び日本道義の宣揚を企図せんとする似而非民主主義」を企てていることを挙げて、「地下に深く潜伏してしまった日本軍閥の播いた思想の種子について嚴重なる警戒とともに、徹底的な搜索と肅清を実行しなければならない」と力説している。

天皇制イデオロギーの根絶と真正なる民主主義の樹立を主張する榛葉の評論が国民党の機関紙『中央日報』及び日本人居留民向けの思想教育紙『改造日報』に載せてあるというのは、彼が日本民主革命同志会のなかにおいても、特に中国側に認められていることを物語っている。彼の主張は日本民主革命同志会という組織全体の思想的傾向を占うものでもあろう。

堀田とのかかわりについていえば、「上海日記」以外、両者の接点をほのめかず資料として、「堀田善衛文庫」に「虹の橋」と題する榛葉の詩稿が残っている²⁵。ただし、そこに事情説明の文言がなく、なぜ書かれたのか、そしてなぜ堀田の手に渡ったのかは一切不明である。なお詩の内容からも、特に榛葉・堀田のかかわりが垣間見えるわけではない。1946年5月15日とはっきり執筆の時期が書いてあるため、上海時代のものだとわかる。

対日文化工作委員会に関係した日本人のなかに、日本民主革命同志会などの「重慶グループ」以外、堀田のように、もともと上海にいた日本人居留民の人々もいた。「上海日記」に登場した者のうち、フルネームで特定できる人物を順不同に羅列すれば、須田禎一、名和献三、石上玄一郎、林寧寿、加田哲二、吉井善吉、林俊夫、井戸豊、緒方俊郎、内山完造、塚本助太郎、室伏クララ、影山巍などが数えられる。なかでも、林・緒方の二人との交流は、「堀田善衛文庫」に収蔵されている資料を通して、引揚げ後にも続いたものと確認できる。1950年から1954年にかけて、林は複数点のはがきと書簡を堀田に

25 資料番号 t/H04/110/00132416.

送っていた²⁶。緒方から堀田宛の書簡も一点ある²⁷。これらの資料は、中国側の史料に徴用された記録が見つかっていない堀田の「留用」体験を側面から裏付けるものである。

林・緒方の二人とも、堀田より帰国が遅れていた。川西政明『武田泰淳伝』(講談社、2005)によれば、朝日新聞社東亜部員の林は、ゾルゲ事件で逮捕された尾崎秀実とかかわりをもっていた疑いがあり、捜査の手が彼の身边に伸びた際、会社側は急遽彼を上海へ派遣した。支那方面軍艦隊報道部の囑託も兼任したので、戦後対日文化工作委員会に徴用されたという。彼は1948年12月、上海からの引揚船で帰国した。しかし、緒方はついに帰国を許されず、結局中国共産党が政権をとった後にも徴用され続け、ようやく1954年9月に帰国を果たし、産業経済新聞社に入ったのである。彼は、同年10月7日の「衆議院海外同胞引揚及び遺家族援護に関する調査特別委員会」²⁸において、中共地区引揚者の一人として以下のように証言している。

私は昭和十六年以来上海に居留いたしておりました。昭和十六年に上海に参りまして中国通信社というものに入りまして、終戦の年まであの地におきまして新聞記者として活動いたしておりました。終戦後は、引揚げの船の参ります間、上海に日僑自治会というものがつくられまして、これが日本人の引揚げ専務及びそれに関連する事務をいたしたのでございますが、その上海の日僑自治会の会長の秘書という仕事をいたして参りました。ところが、終戦の翌年の二十一年一月に、国民党中央宣伝部の対日文化工作委員会という機関ができました、その機関の強い勧めがございまして、その機関に留用となり、主として戦後の中国の事情を日本に紹介する仕事に参加したのでございます。この対日文化工作委員会というのは、その後名称が幾たびかわつたのでございますが、最後は亜東協会という名称になりました。この機関は、上海に中共軍が入城いたします直前まで存続したのであります。この機関についてなお十数名の日本人が仕事に参加しておったのでございますが、その大部分、すなわち私を除きその他は二十三年の十二月に全部留用解除になりました、あの二十四年の十二月の帰国船で帰国したのでございます。私だけは、理由は私今もわからないのでございますが、引続き留用ということになりまして、そのまま残されたのであります。(傍線引用者)

対日文化工作委員会は1946年1月にできたと緒方が言っているが、前記『中央日報』(上海版)1945年12月10日付の記事によれば、その上海事務所は前年12月にすでに設立されていた。対日文化工作委員会の変遷については、緒方がその全過程を見届けたほぼ唯一の被徴用者であるため、彼の証言は注目に値するが、これ以上詳しくは語っていない。

1947年6月30日付の『中央日報』(上海版)に、緒方証言にある「亜東協会」の成立を紹介する記事が出ている。それによれば、極東諸問題の徹底研究を通じ、各国の相互理解や

²⁶ 資料番号 t/H04/300/00113716.

²⁷ 1955年1月15日消印、資料番号 t/H04/300/00113809.

²⁸ 国会会議録検索システム、2018年10月9日閲覧。〈<http://kokkai.ndl.go.jp/>〉.

政府の政策決定に資すべく、中央宣伝部所属の亜東問題研究会と京滬²⁹衛戍司令に栄転した湯恩伯所管の改造出版社が併合して、新たに亜東協会として同年6月29日に設立された。理事の中に対日文化工作委員会の主任羅克典も名を連ねている。

亜東問題研究会は、「上海日記」にも1回出ている。1946年10月21日付の記録に、「中央宣伝部亜東問題研究会といふ字の入ったコークをもらった」とある。対日文化工作委員会は、遅くとも1946年10月に亜東問題研究会へと名称が変わったと推測できる。ちなみに、対日文化工作委員会の上海事務所と同じく、亜東問題研究会の住所も上海昆山路128号であった³⁰。これも側面から両機関の継承関係を物語っている。上海档案馆所蔵の「上海市警察局政治処擬制1947年上海留用日僑名單」³¹に登録されている亜東問題研究会在籍の「留用」者に、前記緒方・井戸・林・室伏・吉井・内山・塚本・影山以外、留用日僑互助会理事長である山田純三郎や医者・貿易業者、ひいては日本料理屋まで、実に多くの職業に従事している様々な日本人がいた。榛葉修など、宣伝工作における実績のあった日本民主革命同志会の日本人は引き揚げた。一方、宣伝工作とは程遠い業種の日本人が「特殊技術人員」という名目で徴用されるようになった。つまり、対日文化工作委員会から亜東問題研究会への改名は、仕事の中心が変化したことを意味していると思える。それを裏付けるものとして、1947年5月1日付の『中央日報』(上海版)記事「中常会昨日通過中宣部改組辦法」において、中央宣伝部の組織改革の一環として、亜東問題研究会が直属の機関から外され、「社会团体」へと変更されたとある。亜東問題研究会は対日宣伝機関から単なる日本人技術者を収容するための組織へと機能がかわったのである。

他方、改造出版社は、前記改造日報館の後続組織である。陸久之などの共産党系勢力が排除された後、新たに社長に就任した徐逸樵^{じよいつしやう}は組織改編を行い、会社名も改造出版社に改めた。機関紙として、日本問題だけでなく、朝鮮問題・東南アジアの問題、ひいてはインド・パキスタンの問題も広く扱う華字誌の『亞洲世紀』(月刊)を創刊した。亜東問題研究会との併合以降は、亜東協会の機関紙として継承されていく。創刊号(1947.5.1)から終刊号(1949.5.1)まで、合わせて19号発行された。そのうち、前記の緒方俊郎は1948年2月10日号に「国際情勢と日本再建」と題する評論を発表している。同評論では、日本を永久平和の国たらしめるには、国内において、中小階級の生活安定と「全体就労」、さらに国際において、分裂しつつある連合国側の内部闘争に左右されないことが必要だと訴えている。同じく戦後日本の民主化を求めるものであっても、天皇制の思想的支柱を根絶すべきと力説する榛葉修の考え方とは大分隔たっている。

ちなみに、改造日報館の日本人「留用」者のうち、島田政雄などの元日本共産党員は強制送還させられたが、まだ何人かの日本人が残っていた。その中に、阿部正捷という画家がいた。その名前は前記「1947年上海留用日僑名單」にも載っている。堀田の『上海に

29 南京と上海、当時国民党政府にとっての政治・経済の中心地。

30 張劍明・呉健熙『老上海百業指南-道路機構工廠商住宅分布図』(上海社会科学院出版社, 2004), p.1.

31 資料番号Q131-6-478. 陳祖恩『上海日僑社会生活史』(上海辞書出版社, 2009).p.534にも収録。

て』では、「三十年前に事情あって日本を離れ、現在[1957年——引用者註]上海博物館に仕事を持つ人」という簡単な紹介がある。要するに、阿部は政権が変わった後にも引き続き中国側に徴用されたのである。この点では、共産党政権から引き揚げる緒方とは対照的である。「堀田善衛文庫」のなか、阿部から堀田宛の書簡が二通ある³²。同書簡によれば、『上海にて』を書く途中、堀田は阿部に資料の依頼や中国事情に関する問い合わせをしていたとわかる。これらのことからすれば、改造日報館にこそ入らなかったが、堀田は当時そこに徴用された日本人とも関係を持っていたと思われる。

5 徴用期における堀田の中国認識

被徴用者のなか、戦時中から中国側に協力し、天皇制打倒を志向する日本民主革命同志会の元日本軍捕虜や改造日報館に集まっている元日本共産党員の人々、戦時下において「和平」を志向していた元新聞記者の人々³³など、実に多彩な思想的傾向を持つ日本人たちがいた。以上述べてきたように、堀田はどちらにもかかわりをもっていたと思われる。しかし、彼の立ち位置がどうであったのかは必ずしも明確ではない。それを探る手掛かりとしては、やはり「上海日記」での記述と、前記「希望について」及び「反省と希望」しかない。このほか、筆者の調査では『新生』にも評論を書いたことが確認できる。

堀田は、1945年10月5日に創刊したばかりの『改造日報』にその翌日号から、3日間にわたって「希望について」を連載していた。同評論は、まず敗戦後日本人居留民全体に見られる無反省に対する批判から始まっている。

敗戦のために絶望してしまひ、何一つ仕事が手につかなくなり、茫乎として完全に自失してしまつたといふ人の例を未だ私は聞かないのである。(略)我々は今日まで二重の生活を送つて来た訳である。即ち必勝の信念と必敗の信念と、二つの信念を持って生きて来たといふことになるではないか(略)、敗戦決定後の現地諸新聞の言説なども人間としては零以下であらう。道徳の低下などあたりまへ以上の事である。(略)そろそろ落ち着いてこのたびの戦ひの間に各々は人間として如何であったか、といふことが考へられてよいのではないかと思ふ。

日本の必勝を確信していた日本人の多くが敗戦を衷心から悲しまなかつたことを、堀田は「道徳の低下」と批判している。彼のいう「敗戦決定後の現地諸新聞」には、当時上海における唯一の日本語新聞『大陸新報』(1939.1.1創刊)が含まれているはずである。同

³² それぞれ1958年1月11日と1958年2月10日の消印、資料番号t/H04/300/00131104。

³³ 前出元朝日新聞社記者の須田禎一や林俊夫など。戦争末期、上海を舞台とした日中間の水面下における和平交渉に従事したそれらの人々に、堀田が何らかのかたちで関わっていたと思われる。

紙は1945年9月26日に、湯恩伯から派遣された陸久之によって接収される³⁴まで、敗戦後もしばらくは発行を続けていた。この期間中の同紙コラム「自分はいかに思ふ」を調べた限りでは、敗戦後日本人の取るべき態度について、例えば以下のような考え方が呈示されている。

①1945年9月6日付、日僑自治会給与部長稲垣登——「今こそ我々は自己を滅し、社会愛、公共愛、隣保愛の神髓を遺憾なく發揮すべき秋と痛感する」。

②同年9月8日付、元上海自然科学研究所長佐藤秀三——「決して卑屈になったり、暗くなったりしてはいけないといふことだ。中国人はじめ各国の人々と伍して立派に生き抜いていくだけの人間的な高さが必要だ」。

③同年9月9日付、栗本寅治——「日華今後の交誼には何ら外交的粉飾なく赤裸々に、切っても切れぬ肉親の間柄としてかつてなき親睦を以て深い交わりを維持していけるはずであると固く信じて疑わない、そしてかくあってこそ戦争に払った大きな犠牲も償われて余りあると思ふ」。

④同年9月10日付、元中支振興株式会社副総裁伴野清——「過去に於ける日華親善や日華提携が、ともすれば上滑りであったのは日本の立場を主として独りよがりな少なからず包蔵していたためであるが今や両国の関係は過去のゆきかかりを清算して再出発し、真の結合を図る機械に恵まれることになったのである」。

これらの主張は、各人の職業柄、必ずしも一致していないところもある。とはいえ、敗戦に拘泥せず、未来志向を以て日本あるいは日本人の再生をはかるべきとの傾向は共有されていると言える。このような傾向を、堀田は「人間としては零以下」と酷評したものと思われる。彼は過去への清算・反省をきちんと行った後に未来を志向すべきであって、過去を正しく総括せず、簡単に未来を志向することを戒めている。しかし、何を反省すべきかについて、「希望について」では、明言しなかった。かわりに、彼は日本の古代へと話題を転じていく。大きな業績を残した昔の文人の大半がみな隠遁したのと同じように、近代の私小説家も「一種の出家」だと彼はとらえ、その理由は「長い長い日本の憂鬱、日本の宗教的厭世観」にあると指摘している。そうした論説は、戦時中雑誌『批評』³⁵に連載していた評論「西行」³⁶にも見受けられる。ただ「日本の憂鬱」・「日本の宗教的厭世観」に取りつかれた戦時中の堀田と違うのは、「永遠の希望は各々のいつかは死

34 『中央日報』(上海版,1945.9.27)記事「日大陸新報昨接収」を参照。

35 吉田健一など主宰、1939年8月創刊、1945年2月廃刊。堀田善衛は国際文化振興会に就職した後、上司伊集院清三の紹介で、1943年に同人として同誌に参加。

36 1943年12月号-1944年11月号に連載。西行の短歌及びその人生を批評しながら、戦時中における堀田自身の気持ちもしばしば仮託されるかたちで展開している。なお、同評論の未発表草稿と思われる二通の原稿は神奈川近代文学館で確認されている。詳細は拙稿「上海以前の堀田善衛——国際文化振興会とその周辺」(『国語と国文学』第1144号,2019.3)をご参照ください。なお、1945年8月1日に上海で創刊された日本語雑誌『新大陸』に投稿された堀田の評論「上海・南京」(秦剛によって発見、『すばる』(2018.8)に全文再掲)において、「西行」における論調を引き継ぎつつ、抽象的だが、「時局的なイデオロギーにいささかも縛られない」(秦剛)思考もにじみ出ている。

すべき人生にしかない」、「永遠なる日本もまた各々の死滅すべき人生にしか存在せぬ」と「希望について」で結論したように、「日本の憂鬱」からの脱却は新たに生まれ変わるしかないと主張しているところである。

かくして、堀田は「日本の憂鬱」や「日本の宗教的厭世観」をもっぱら歴史的・伝統的な面でとらえている。勿論それは同時に彼の生きている「現代」を照射するところもあろうが、明確には書いていない。それに比べて、「反省と希望」において、「希望について」で言及された「憂鬱」は、彼自身の経験に沿いながら説明されている。上海到着後、自らの感じた「絶望に近い憂鬱」の中身を堀田はこう書いている。

日本のやり方が常に政策、国策の一点張りでその間に人間性に対する反省を欠いていた(略)、私共にとっては以前から分ってゐたことなのだ(略)、分ってゐ乍ら、それと矛盾したことを行はねばならぬ苦痛を私共は実に長年味はって来たものである。もはや良心のために麻痺しかゝってゐたのかも知れない。

国策一点張りの戦時体制に対する批判、その戦時体制に不本意ながらも協力させられたことへの反省である。ここまで来ると、堀田の意図した反省の対象は、個人レベルにおける戦争責任だとわかる。無論それは戦後になってからはじめて言えることであって、戦時中では、それを自覚したとしても、戦争への加担を余儀なくされているため、「憂鬱」に陥ってしまった。結局そのやるかたなき戦時中の「憂鬱」を「日本の宗教的厭世観」(＝「無常観」)にひっかけて、「長い長い日本の憂鬱」の一環としてとらえるしかなかった。そのうえ、当然「憂鬱」の解消に向けて有効な措置も講じられなかった。ところが、戦後約一年経った1946年6月の上海で発表された「反省と希望」においては、いったん戦争責任に触れながらも、「憂鬱」をもたらした戦時体制へのさらなる追及をせず、日本の文化立国へと方向を転じたのである。

日本は絶対非武装の国となり、結局は喜ばしくも文化国家建設がその最高目標として与へられたのである。こゝに於て中国の文化人諸氏青年諸兄にお伝へしたいことは、共に東方の眼覚めたるものとして、人生の幸福が一つに東方と世界の平和安定にかゝってゐることを、我々の人生の運命として今日深く自覚し、その上で中日の文化的共同運動に従事せんとする謙虚な熱望を我々が有してゐるといふ一事である。

戦前の国策一点張りを改め、戦後文化国家の建設を目指しながら、中国との連携をはかる、と堀田は戦後日本の青写真を描いている。しかし、それはあくまで中国を念頭に置いた対外的な姿勢である。戦時中の「憂鬱」をもたらした日本の国内体制(＝天皇制)の問題をどのように扱うべきかについては、「文化国家建設」という抽象的な目標だけ掲げていて、具体的な見通しを立てることはなかった。「日本は絶対非武装の国」となったこ

とを「中国の文化人諸氏青年諸兄」に訴えるのは、明らかに対外のアピールであって、対内の問題提起ではない。1946年6月の堀田は、自身のいう「憂鬱」をはっきりと天皇制に関連付けていいはずだったにもかかわらず、「憂鬱」を脱却すべく、新たに生まれ変わるべきことや、個人の戦争責任への言及といったそれまでの主張を更に具体化することなく、日中関係のあるべき姿へと方向転換したのではないか。となれば、彼自身の主張も、結局『大陸新報』に掲載された前記4人の未来志向に歩み寄るのではないか。従って、『記念碑』(中央公論社、1955)や『方丈記私記』(筑摩書房、1971)などに見られる顕著な天皇制批判の傾向は、まだ戦後上海の堀田には生まれていなかったと思える。

なぜ上海時代における堀田の戦争への反省が最終的に対外的な姿勢へと舵を切ったのか。戦後の中国社会において、依然日本に対する根強い不信感に当時の堀田が接したことは大きな要因だろうと考えられる。それを物語る堀田の評論は、『新生』第5号(1946.5.15)にある。「中国のポスター」と題する同評論の作者は「伏木海之」になっているが、堀田のことである。同評論に引用された中国のポスターの文言がそのまま『上海にて』の「町あるき」に再び引用されていること、そして、堀田の生家が日本海に面する現在の富山県高岡市伏木地区にあることが、その判断材料である。それはともかく、当時堀田の中国認識を象徴する同評論の結論部分を以下のように引用する。

今日中国の諸論調は、新聞自由の下にあって、多彩を極めてゐるが、全部が全部一致してゐることは、対日本論である。例へば、先日のマ司令部から中国外交部に照会して来た、中国沿岸に於ける日本漁船の魚獲を許可するや否やとの申し出に対しても、「戒厳日本の新侵略」といった輿論が出たり、又マ司令官襲撃未遂事件があると、「透視日本の地下層」といふ社説が大新聞に出る。さうしたものの中には随分見当違ひな所説もあるが、我々は中国人心の髓の髓まで徹してゐる何物かについて、将来とも充分顧慮省察するところがなければならぬ。「中日親善」といふ口頭禅で、骨の髓に徹してゐるものを除去したり出来ると思つたら、大間違ひだ。

マッカーサー司令部から中国外交部への照会云々の部分は、「上海日記」にも出てくる。

もう新聞はまちまちの主張をのせるやうになり、一致してゐるのは、日本論だけである。近頃マ司令部が中国外交部へ中国近海で日本船の漁獲を許可するかしないかといふ申出があつたに対し、日本は新たなる侵略を企図してゐるといふのである。とにかく日本は恐ろしいらしい。今日も「新聞報」は「透視日本の地下組織」といふ悪どい社説をのせてゐる。

中日親善は空疎なスローガンに過ぎず、中国人の骨の髓にまで徹している日本への不信・警戒に目を向けるべきだという趣旨を、堀田はプライベートな日記に記録しただけでなく、匿名だが、国民党の中央宣伝部によって発行された『新生』にも公表してい

る。こういう認識があったからこそ、一か月後に発表する「反省と希望」において「日本は絶対非武装の国となり、結局は喜ばしくも文化国家建設がその最高目標として与へられた」と強調したものと思われる。被徴用体験に取材した『歯車』（『文学51』、1951.5）や『歴史』（新潮社、1953）のなかで、戦後の中国革命に触れることこそあれ、今日でも時折再燃する上述のような日中間に横たわる国民感情の問題は姿を現していない。堀田の戦後作品もさることながら、彼の被徴用時代をとらえるには、前掲のような上海時代に発表された文章における当時の考え方がより即物的ではないか。

6 終わりに

『上海にて』に堀田は自身の上海体験をこう書いている。「私は日本の侵略主義、帝国主義について、別して政治的、経済的、あるいは政治史、経済史的な理論的理解をもっていなかった。私の理解したものは、すべて、たとえばいまあげたような経験によるものであった」。「いまあげたような経験」の一つは、ある日本兵が中国人の花嫁に性的暴行を加えようとしたところ、その場に居合わせた堀田が制止して、当の日本兵に蹴倒されたことである。

このような経験は当然あり得ただろう。戦後の日本あるいは日本人に対して、中国人がなおも不信感・警戒心を抱いていた背景に、戦時中におけるそのような日本軍の暴行があったことは、様々な証言から明らかである。ほとんどの日本人居留民が引き揚げた後にもなお上海に踏みとどまった堀田は、当然のことながら、中国人からの不信感・警戒心を直接体感していたはずである。この点について、「中国のポスター」において、彼は鮮明に指摘したが、同じ材料を利用して、1959年に刊行された『上海にて』では、少なくともわかりやすいようには書いていない。ただ「現代における両国のあり方の、基本的な差異は、(略)双方の国民の内心の構造の違いから来るものは、もっとも本質的」である、あるいは「同文同種などという虚妄のスローガンに迷わされてはならない。中国は外国なのであり、中国人民は、外国人なのだ」と抽象的に指摘しただけである。

この点は、戦争責任についての自覚とともに、彼の被徴用体験を構成する重要な部分である。戦時中の国策一点張りへの批判・反省は評価すべきだが、戦後上海での言説を見た限りでは、『方丈記私記』などで見せるような天皇制への追及にはまだ至っていない。少なくとも尖鋭に見える榛葉修の天皇制批判と比べて、堀田の立場は穏健であった。そして、きちんと中国側の対日不信を認識せねばならないという姿勢も、一方的に中国側に歩調を合わせるように見える榛葉の主張と一線を画している。

時代の変化に伴い、中国側の対日宣伝機関は対敵科・対敵宣伝委員会から対日文化工作委員会、亜東問題研究会、亜東協会へと変化していく。榛葉などの日本民主革命同志会

のメンバーは、変化の前段階に位置していた。彼等の戦場・捕虜体験は、天皇制打倒の主張をもたらしたかもしれない。一方、同じく天皇制の打倒を主張した「重慶グループ」のなかでは、鹿地亘の日本人民反戦同盟は共産主義を志向していた。そのことで、重慶政権に弾圧される結果となった。

敗戦後に徴用された「上海グループ」のなかにおいても、共産主義者と非共産主義者は結果的に別々の中国側の機関に集中することになった。事実上中国共産党が運営している改造日報館には共産主義者が集められたのに対して、国民党の宣伝部には非共産主義者が関わっていた。非共産主義者のなか、林俊夫や緒方俊郎のように、戦時下における和平勢力に属していた人もいれば、内山完造のように、長年上海に定住していた著名な文化人もいた。必ずしも文化・宣伝工作に役立たないような人物さえあった。

経歴的・思想的に多様性のある「上海グループ」のなか、堀田は共産主義者でこそなかったが、戦後の日本を展望するにあたって、戦時日本への批判・反省をする一方、戦後中国人の日本観に気を取られたため、天皇制批判からそれて、日本人のあるべき中国観の提起へと軌道修正したのではないと思われる。

参考文献

- 紅野謙介編(2008)『堀田善衛上海日記 滬上天下一九四五』,東京:集英社. Kono, Kensuke(2008) *Hotta, Yoshie Shanghai niki kojyou tenka 1945*. Tokyo: Shueisya.
- 中園英助(1993)『私本・GHQ占領秘史』,東京:徳間書店. Nakazono, Eisuke(1993) *Shihon: GHQ senryou hishi*. Tokyo: Tokuma shoten.
- 陳童君(2017)『堀田善衛の敗戦後文学論——「中国」表象と戦後日本』,東京:鼎書房. Chen, Tongjun(2017) *Hotta Yoshie no haisengo bungakuron: tyuugoku/hyoushyo to sengo nihon*. Tokyo: Kanae Syobo.
- 堀田善衛(1974)『堀田善衛全集』第12巻,東京:筑摩書房. Hotta, Yoshie(1974) *Hotta Yoshie zenshuu* 12. Tokyo: Chikuma shobou.
- 「土井章名誉教授記念論文集」(1980),東京:『東洋研究』第56号. Tutii, Akira meiyu kyojyu kinen ronbunshuu. Tokyo: Touyou kenkyuu Vol.56.
- 児玉誉士夫(1975)『われ、かく戦えり』,東京:広済堂. Kodama, Yoshio(1975) *Ware, kaku tatakaeri*. Tokyo: Kousaidou.
- 陳祖恩(2009)『上海日僑社会生活史』,上海:上海辞書出版社. Chen, Zuen(2009) *Shanghai riqiao shehui shenghuoshi*. Shanghai: Shanghai cishu chubanshe.
- 川西政明(2005)『武田泰淳伝』,東京:講談社. Kawanishi, Masaaki(2005) *Takeda Taijun den*. Tokyo: Kodansha.
- 貴志俊彦(2006)「中国奥地の日本人捕虜と日本語放送」,貴志俊彦・川島真・孫安石編『戦争・ラジオ・記憶』,東京:勉誠出版. pp.77-87. Kishi, Toshihiko(2006) *Tyugoku okuchi no nihonjin horyo to nihongo hoso*. In *Sensa, Radio, Kioku*. Kishi, Toshihiko and Kawashima, Shin and Song, An Soku. Tokyo: Bensei syuppan, pp.77-87.
- 金学成(1982)「有関改造日報社的一些情况」,『文史資料選輯』第40輯, p.58. Jin, Xuecheng(1982) *Youguan Gaizaoribaoshe de yixie qingkuang*. *Wenshi ziliao xuanji* Vol.40, p.58.
- 陸久之(1982)「創辦<改造日報>の経過」,『文史資料選輯』第40輯, p.64. Lu, Jiuzhi(1982) *Chuangban*

'Gaizaoribao'de jingguo.Wenshi ziliao xuanji Vol.40, p.64.

武燕軍(1990)「抗戰時期国民党政府的國際宣伝処」,北京:「歴史档案」第38号, p.125. Wu, Yanjun(1990) Kangzhan shiqi guomindang zhengfu de guoji xuanchuan chu. Beijing : Lishi dang'an Vol.38, p.125.

丁世理 Shili DING

(中国)四川外国語大学日本語学部講師。日本近代文学、堀田善衛の研究。主著に「堀田善衛の戦時体験——政治への漸近、運動の痕跡」(『語文』第161輯, 2018)、「上海以前の堀田善衛——国際文化振興会とその周辺」(『國語と國文學』第1144号, 2019)など。